



北区立浮間中学校 学校だより

校訓 真善美

令和7年11月号

校長 齋藤 真弓

教育目標 自ら考え正しく判断し 主体的に行動できる生徒

感性豊かで思いやりのある礼儀正しい生徒

心身ともに健康な生徒

文化祭を開催いたしました 10/25 (土)

スローガン「百歌繚乱」のもと、文化祭を開催いたしました。多くの保護者の皆様、ご来賓の皆様に、生徒たちの堂々とした発表の姿をご覧いただきました。6組の歌と合奏で幕を開け、午前中は合唱コンクールの部を行いました。特に3年生の歌声には後輩が憧れを抱くほど素晴らしいものでした。午後は、舞台発表の部として、生徒会、2年生東通村職場体験、3年生英語スピーチ、弁論、吹奏楽部が、それぞれ日頃の成果を発表しました。最後に全校での校歌斉唱は、一人一人が浮間中を大切に、また誇りに思う気持ちのあふれる歌となり、体育館に響きわたり文化祭は幕を閉じました。



合唱コンクールの部 結果

金賞 1年1組 2年1組 3年2組 銀賞 1年3組 2年3組 3年5組

指揮者賞 1年5組 2年2組 3年4組 各1名

伴奏者賞 1年4組 2年3組 3年2組 各1名

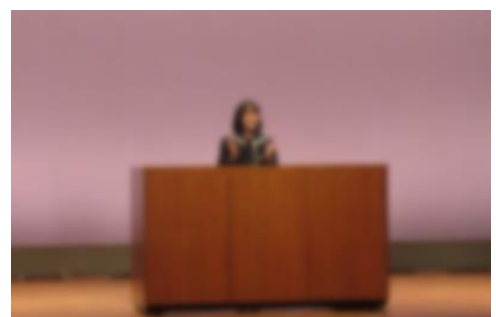
北区中学校連合音楽会 10/28 (火) ・ 連合学芸会 10/31 (金)

吹奏楽部 3年生が引退し、1、2年生で迎えた初めての大会でしたが、素敵な演奏を届けました。



3年 代表生徒

Would you still say the words?



海外派遣に行ってきます

浮間中学校を代表して2名の生徒がアメリカ サンフランシスコに派遣されます。

派遣期間は11月11日（火）から21日（金）となります。

2年代表生徒

私は英語が好きで、将来は英語を通じて海外の人とコミュニケーションをとれるようになりたいと考えています。そのためには、自分の思いを伝えようとする気持ちと、相手の文化や考え方を理解することが大切だと思います。今回が初めての海外で緊張と不安な気持ちもありますが、現地の人々と積極的にコミュニケーションをとり、この海外派遣を楽しく、充実したものにしていきます。

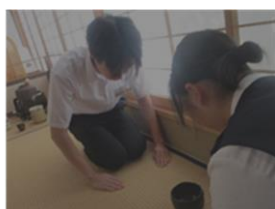
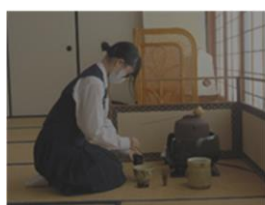
2年代表生徒

私は今、渡米を前にして、非日常を過ごすことへの期待と不安で胸がいっぱいです。浮間中、北区の代表としてアメリカの文化や日本との違いなど、実際のアメリカを肌で感じ、多くのことを学びたいです。セブンヒルズスクールの生徒と積極的にコミュニケーションをとり、浮間中と同行の交流を深められるような関係を築きたいです。

文化部も活躍しています

茶道部 茶会（呈茶）10/8（水）

3年生の成果発表の場として3年保護者の皆様、先生方を招き茶会が開かれました。



「おもてなしの心」を受け取ります。

ボランティア部

赤い羽根共同募金活動

10/18（土）

浮間舟渡駅で北区赤十字奉仕団浮間分団、北区社会福祉協議会の方々と「赤い羽根共同募金活動」を行いました。募金活動はボランティア部として初めての取組で、始めは控え目で遠慮がちでしたが、すぐに元気に声掛けができるようになりました。掛け声やアプローチを工夫して行い、募金をしてくださった方々には目を見てしっかりお礼が言えるようにもなりました。さすが人々のお役に立つことにやりがいを感じる部員たちです。「浮



間中学校ボランティア部活動中」のベストを着ていたので、「えらいね」「がんばってください」など応援の声をかけてくださる方々もあり、日射しが強い時間でしたが、最後までやりがいを感じて積極的に行うことができました。

集計総額の34,128円は、北区内の福祉活動に使われます。去年は、部員にも馴染みのある「キッズタウンうきま」や就業継続支援施設「ブレッド&バター」などで活用されました。自分たちの協力で北区がより良くなっていくことが、部員たちの何よりの喜びです。ボランティア部は、昨年度より外部団体と連携して活動内容や範囲を広げています。今後も、地域の方々と交流を深めながら地域のお役に立てるよう頑張ります。

（ボランティア部顧問）



偽りの自分と本当の自分

私たちはいつも日々の生活の中で様々な役割を演じながら生きています。家での自分、学校にいるときの自分、友達と話しているときの自分。場面に応じて求められる姿に応えようと自分を偽ることは、日々生活する上で必要不可欠なことかもしれません。でもそれは、知らぬ間に自分を苦しめ、求められる姿になろうとするあまり本当の自分を見失ったり、自分の気持ちを人に話すことを拒むようになってしまうこともあるのではないのでしょうか。

幼い頃の私は人一倍大人しく、母の話によると一度も外でぐずったことがないそうです。その性格が故、幼稚園では先生の目の届きにくい席が私の指定席。手のかかる男子たちの中に女子一人だけでグループを組まされたりもしました。「自分以外にも女子がいるグループがいい」。幼い頃の私にはそんなことを言える場所も機会もありません。私はいつも、大人しく先生の話聞き、騒ぐこともありませんでした。そんな私のことを大人たちは「大人びている」「しっかりしている」と褒めてくれました。今思うと、その頃から自分の感情を押し殺すことを覚えてしまったのかもしれない。

小学生の頃は自分の感情を出すこと以前に人からどう見られるかを気にして、今以上に人前に対しての恐怖心が強く、自分に日直の当番が回ってくることや授業内での発表などがなによりも憂鬱なことで、それを理由に学校に行きたくないと言っていたこともあります。人と関わることも、人前に立つことも苦手な私は教室の中でも端っこで本を読んでいるのが一番楽だし、その分家では別人のようにふざけてずっとしゃべっている。それが今も変わらず私の思う「本当の自分」です。高学年の頃から周りの先生からの声や自分を変えたいという多少の思いから人前に立つことを自分でも選ぶようになり、中学生になってから学級委員という新しい自分の姿と出会うことになりました。

しかし、学級委員長という立場になったからといって、人前に立つことが好きになったわけではありません。今でも正直、大の苦手なことです。自分が失敗しないようにすることばかり考えて、たくさん準備をして、何とか平常心を保って要領よくこなしているように見せる。それが私なりのやり方です。クラスのみんなに注意することだって、本当はやりたくありません。それでも私がこの自分の立場で居続けているのは、過去の私のためです。「誰かの面倒を見る役なんてやりたくない」「だめなことはだめって言いたいのに言えない」。そう思っていた幼い頃の私を救いたい。そして、その私と同じ思いをしている誰かのために、私は今日も「学級委員長」という私の中の一面を演じてクラスの前に立っています。時には、嫌われ役を敢えて買って出ることだってあります。それは「偽りの自分」かもしれませんが、「本当の自分」を守るための私なりの戦いなのです。

私たちはまだ中学生。今後の人生を歩んでいったとき、何度も人生の岐路に立たされることでしょう。そんな時、何を選ぶべきか。私は過去の私のように自分の気持ちを押し殺して後悔するような選択はしたくない。これからの自分が少しでも自分らしくいられる道を選びたい。こうして私が入前で自分について話すということも私の中で大きな一歩ではありましたが自分の心の内を明かすことが「本当の自分」を尊重することの一つであると、この機会に知ることもできました。

自分の人生を決めるのは他人ではなく自分自身です。何よりも大切なのは本当の自分の気持ちに嘘をつかないことです。だからこそ、私たちは本当の自分を愛し、信じて生きていくべきなのです。

Would you still say the words?

"The casual words you say might be the last someone ever hears. Given this, would you still choose to say them?"

Words are essential to communication. We know intellectually that words can be weapons that hurt others, or magical tools that encourage and uplift. Yet, when we're under stress or unable to control our emotions, we often — myself included — end up using them in the wrong way.

Whenever I reflect on this, I'm reminded of a story my teacher once told me—an event that happened to a young girl during the Great East Japan Earthquake. The night before the disaster, the girl had a huge argument with her mother about her future. She shouted, "I hate you, Mom!" The next morning, as she left for school, she ignored her mother's "Have a good day!" That turned out to be their final interaction. The last words she ever said to her mother, who was later swept away by the tsunami, were "I hate you." More than ten years have passed since the earthquake. I wonder what she's thinking now, where she is, and how she's living her life. Just imagining the regret she must carry for the rest of her life fills me with sadness. Today, I want to talk about "the power of words."

First, we must acknowledge that words can be weapons that hurt others. Nowadays, among young people, phrases like "drop dead," "gross," or "so annoying" are often tossed around casually. But in reality, countless tragic incidents have occurred where people were verbally attacked on social media and ended up taking their own lives. I've had my own bitter experience. When I was in 5th grade, I overheard a student telling a classmate, "You should just die!" I was shocked. "This is bullying! I have to help!" I reported it to a teacher—only to become the next target. But what shocked me even more was seeing those same students chatting together just days later, as if nothing had happened. It made me realize that how words are received depends deeply on people and context, which showed me just how frightening words can be.

While words can be weapons, we must not forget their positive power as well. It's now commonly understood in neuroscience that "words have the power to change our brains." My mother, no matter what she's doing, always comes to the door whenever someone in our family leaves the house and says, "Have a good day. Be careful." When I asked her why, she said, "Because if something were to happen, I'd regret not seeing them off properly." When I heard that, I felt the deep love hidden in such a simple, everyday phrase. Such words can increase alertness and potentially reduce the chances of having an accident. Similarly, many top athletes around the world consistently speak only positive, self-encouraging words to themselves. Speaking positively improves performance by influencing our memory and mindset, leading to better outcomes. This phenomenon is known as the "priming effect." In this way, words impact the brain and have the immense power to change our behavior—and even our lives—for the better.

Words can become "weapons" or "magic" that brings positive change to our lives. A single, casual phrase spoken in daily life might end up being the last words someone hears. Not many people may have thought about this possibility. But the truth is, none of us knows what tomorrow holds. That's why I want all of us to be more sensitive to words that hurt others. Of course, there will be times when we speak from emotion and make mistakes.

But even so, we need to remember the power words hold. I want us to speak words of magic and love to others, just like my mother does.

And so I ask you once more: The casual words you say might be the last someone ever hears. Given this, would you still choose to say them?